

TAKE FREE

ZAMA+ | vol. 00

北海道教育大学岩見沢校 卒業生へのインタビュー



+ 大学事務職員

煤田 真実 SUSUDA MAMI

Topics

美術を始めたきっかけ
画家としての原点
恩師との出会い
仕事と制作
北教大岩見沢から、その先へ

ZAWA+について

2020年より、新たに始まった i-BOX のシリーズ企画「ZAWA+」。本展では岩見沢(ZAWA) から飛び立った、卒業生のその後と現在(+)をご紹介します。岩見沢校が現在の芸術・スポーツを学ぶ大学に形を変えてから十年以上が経過しました。これまでに岩見沢の地を巣立った卒業生たちは、社会経験を積みながら近年、活躍の幅を広げつつあります。教員、会社員、クリエイター… 様々な進路に進んだ卒業生たちは、今一体何を考え、何を作っているのでしょうか？「ZAWA+」では、社会とかかわりながら、自らの作品を作り続ける卒業生の皆様をご紹介します。



vol. 00 + 大学事務職員

ススダ マミ

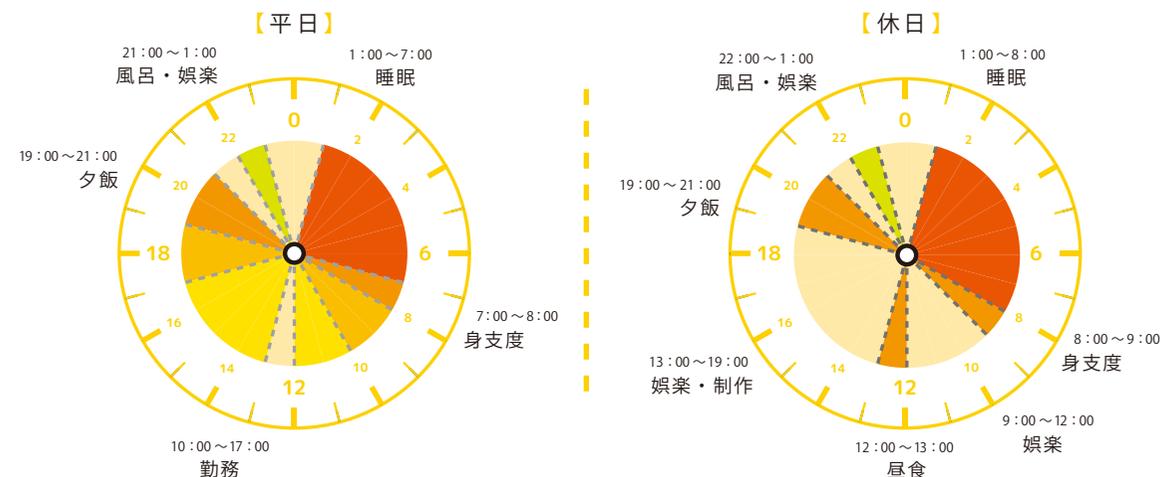
煤田真実

煤田真実23歳。小学生の頃に姉の影響で絵を描き始める。ウサギの絵を両親に褒められたことから美術に目覚める。11歳から13歳まではプラスバンドを習っており、絵を描くことは姉と二人で続けていた。進学する高校選びでオープンキャンパスに参加した際、「美術で一攫千金狙わないか」という美術部の顧問の言葉に衝撃を受け進学を決意する。入学後は美術部で学校祭のパンフレットや各種ポスターなどを顧問に言われて制作していた。そのほか、個人での作品も様々な賞を受賞しており、Googleロゴのデザインコンテスト「Doodle 4 Google」では高校生部門優秀賞を受賞した。大学選びも本学のオープンキャンパスに訪れた際に、教授たちの言葉に感銘を受けたため進学を決めた。大学ではこれまで続けてきた、ペン画の他に水彩色鉛筆やDMデザイン、アニメーション、映像・写真作品、コピーライティングなど幅広い芸術制作に取り組んだ。所属はメディアコンテンツ研究室だったが、卒業制作は、ペン画で行った。主な受賞歴として、札幌フアクトリー内にある「Sousei Marche」の壁画コンペに入選し、現在も作品は展示中。卒業後は本学事務局の広報・地域連携グループにて、大学広報物の制作やi-BOXでの業務を担当。好きなものは余白、自分の名前、伊坂幸太郎の著書。嫌いなものは東京、高飛車な人、朝。

ススダさんってどんな人？

HITOTONARI SPACE

Q.1 | ススダさんの一日



Q.2 | ススダさんの5カジョウ

- + 理不尽なことを人にしない
- + 直感を信じる
- + 波風立てない
- + とりあえず一回寝る
- + 思ったことは素直に言う

Q.3 | 現在のお仕事



1. i-BOXで開催される展覧会のポスターを学生が作ったDMをもとに制作しています。また、i-BOXの企画展のポスターなども制作しています。このZAWA+のロゴや冊子も制作しました。

2. 大学での広報物をいくつか制作しています。オープンキャンパスのフライヤーや進学相談会のブース装飾などを制作しています。



※1.「Sousei Marche」壁画



— そんな高校時代を経て、本学へ進学を決めたのもオープンキャンパスがきっかけなんですよ。

先に伝えたいことを決めて、それをいかにわかりやすく伝える方法があるか逆算しよう、と大学のオープンキャンパスで聞いて感銘を受けました。この言葉を聞いてから、受け手の視点というものを強く意識するようになりました。高校もなかなか美術部に力が入っていましたが、大学での学びは本当に専門性が高かったです。先生たちはもちろんですが、学生のレベルもすごく高く、いつも刺激を受けていました。それまではペンをメインに取り組んでいましたが、大学ではいろいろな制作を経験することが出来ました。Sousei Marcheの壁画^{※1}や札幌の「ムーラ」イターのイベントに参加させていただけなど、学外にも活動の幅を広げて自分の技量を磨いてきました。

進歩する技量と遠ざかる原点



高校3年生の頃の作品「Crystal hog」

絵を描くきっかけになった姉

— 煤田さんが絵を描きはじめてきっかけはお姉さんの影響と伺いました。

高校に入るまでは美術部には入らずに姉と二人で絵を描いていました。初めは本当に落書き程度でしたが、褒められたのが嬉しくて続けていました。姉とは本当に仲が良くても作品を見せあったりしています。ウサギの絵から漫画やアニメの模写へと、その時に興味があったものへと題材が変わっていきました。

運命的な出会い

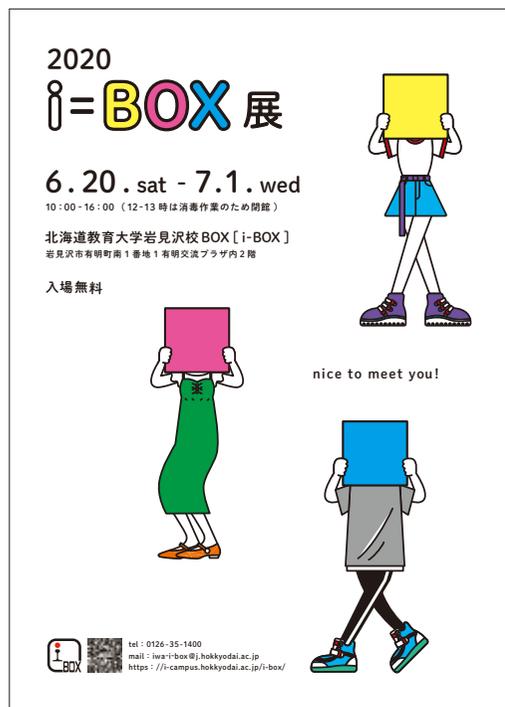
— お姉さんからの影響があって美術の道に入られたということですが、その後はどんな出会いがあったのでしょうか。

自分で言うのも何ですが、私はかなり意志が強いと思います。高校を選んだのは100%あのオープンキャンパスが決め手でした。

それ以降は親や先生に何を言われようと、私は絶対にあの高校に入ります、と宣言していました。大学も事前にある程度行きたいなという思いはありましたが、オープンキャンパスで決めたところがあるのでオープンキャンパスで過ごすごく意味のあるものなんだなと思います。笑

— オープンキャンパスで「美術で一攫千金狙わないか」という言葉に衝撃を受け進学したのは、北海道立札幌北陵高校でした。すごい先生ですね（笑）

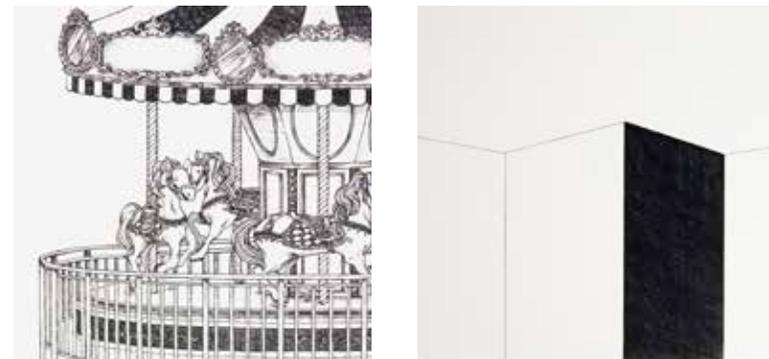
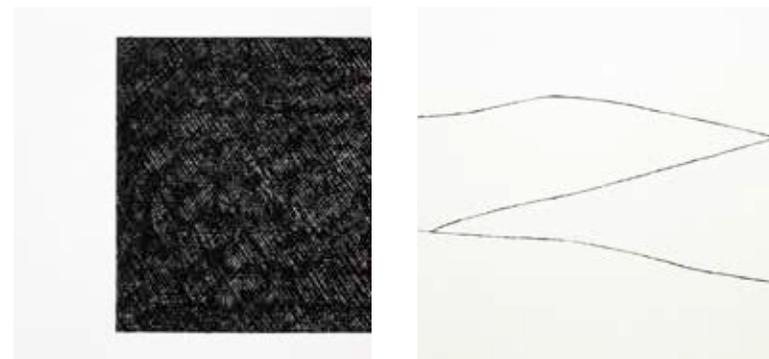
高校の美術部の顧問は本当に強烈でした。一攫千金を狙わないかなんて普通言わないですよ。そんな先生に言われるがままに、いろんなポスターや時にはクリアファイルのデザインまでなんでも取り組みました。その頃は特に今のような苦しさは感じていなかったと思います。専門的な技術や知識をあまり持ち合わせていなかったからかなと思います。



※3. i-BOX展 ポスター



※3. オープンキャンパス ポスター



※3. 「線と余白」600×600mm 4点

「スランプに陥ってしまったことですが、現在はどんな状況でしょうか。」
 ネガティブな内容が続きましたがそんなことばかりではないです。今は大学職員として自分が学んできたデザインの知識や技術を活かしていると思います。*3 受け手を意識した制作を在学中から行っていたので、相手にとってわかりやすいという視点や日常的にデザインを批評的に捉える思考は習慣化されていますね。

確かに身についた力。これまでの自分と「線をきる」
 か、コピーライターか。どれもいい評価や賞をとってきたこともあって強みがわからなくなりました。広く浅くではなく得意なものを持って先生に言われても、自分では決めきれないでいました。芸術に関わる仕事に就きたいと目標を定めた就職活動でしたが、自分の一番の武器は何で本当にしたい仕事は何なのか、という問いに自らが答えられませんでした。

「小さい頃から続けてきた美術に没頭することができて、とても幸せな時間だったのではないだろうか。」
 ただ、力がついた一方で、一人のアーティストとしての私はつまづきを感じていました。テーマを与えられたデザインコンペや仕事の依頼では、日頃から培ってきた他者目線での制作が出来ていて、自分でも自信が持っていました。一方で、描きたいものを描く、純粹に絵を楽しむという気持ちを思い出せなくなっていました。その作品には意味があるのか、何を伝えるために作品を描くのか、その技法はデザインのセオリーに反していないか。こんなしがらみがペンを持つとうとする私につきまとうてきました。美術について詳しくなってしまうが故に、高くなったハードルが怖くなってしまいました。

また、色々なことに挑戦してきたことで、自分の本当にやりたいことが見えなくなっていました。イラストレーターか、デザイナー

ZAWA+

ロゴについて

卒業したあとどんな仕事をしていても、生活をしていても、大学で学んだことや、大学の仲間たちと過ごした時間は生かされている。どんな経験も、この先の自分につながっていく、という意味を込めて、「ZAWA+」の文字を一筆書きのようにつなげました。また“人生山あり谷あり”というイメージに合わせ、丸みを帯びたデザインにしました。

ZAWA+ vol.00 煤田真実「線をきる」

会期：2020年10月1日（木）～10月15日（木）

時間：10：00～12：00、13：00～16：00（※最終日は15時まで）

会場：北海道教育大学岩見沢校 BOX [i-BOX]

岩見沢市有明町南1番地1 JR 岩見沢複合駅舎 有明交流プラザ2階
入場無料

企画：北海道教育大学岩見沢校 i-BOX

尾崎芳子 / 煤田真実 / 藤野留朱 / 吉川幸佑



仕事ではない作品の制作についても、今は少しずつりハビリのよさな感じで始めています。自分の中で勝手にアプリに頼っているだけだ、と距離を置いていたデジタルでの作品に手を出したり、学んできたセオリーを無視したデザインを取り入れたり、新たなことに挑戦しようとしています。これまでは仕事の制作だけでなく、個人の領域にもルールや意味を設定しようとして苦しくなっていたのでそんなしがらみや過去のあれこれと決別するという意味で今回の展示は「線を切る」というタイトルにしました。

「線」という表現はどこから着想を得たのでしょうか。

線は私のアイデンティティだと思っています。自らの手で引く細い線に、その人の人格が出ると私は考えます。これまで多くの制作ジャンルに手を出してきましたがやはり一番多かったのはペン画でした。今回の展示でもペン画をやるかもしませんが、そんな直線に対する強いこだわりや執着心も一旦

の隅に置いて、新しい私になりたいという想いが込められています。

北教大岩見沢から、その先へ

「これからの抱負や目標についてお聞かせ願えればと思います。」

私の人生はまだまだ始まったばかりだと思っています。美術に関わる仕事で、自分は何がしたいのかという問いにまだはっきりと答えることはできませんが、既に今の環境においてこれまで培ったものが私を助けてくれています。また、思い悩んだ時には同じ時間を過ごした友人たちと尊敬する先生が話を聞いてくれます。私がこの大学に入って一番よかったと感じることは、真面目なことも何気ないことも語り合える人たちに出会えたことだと思っています。この展示を契機に、自分も一歩前に進みます。

